

リ  
セ  
ツ  
ト  
4

▲ユリウス

エアデルトの王太子で、カインの腹違いの兄。

▲ニール侯爵

エアデルトの宰相で、カインを保護していた人物。

▲ジーン

ルーナの長兄。  
リュシオンの腹心。

▼オリバレス

ロウィーナの側近で、参謀役。

風姫▶

風の精霊王。

ルーナの守護者たち

ロウィーナ▲

エアデルト王妃。  
カインを排除すべく  
策略を巡らせている。

▲レグルス&シリウス

神獣。真の姿はそれぞれ  
黄金の獅子と白銀の狼。

▼カイン(16歳)

ルーナに助けられ、公爵家に  
身を寄せていた少年。実はエ  
アデルト国王の庶子。

▲リュシオン(17歳)

クレセニアの王太子。  
強大な魔力を持つ魔法使い。

ルーナ(9歳)▼

千幸が転生した姿。  
リヒルーチェ公爵令嬢。  
前世の記憶と強大な魔力を  
持ちつつ人生やり直し中。

フレイル(15歳)▲

精霊使いの少年。その力は  
他人には秘密にしている。

▲千幸(享年18歳)

超不幸体質の女子高生。

## 第一章 神々のもたらせし果実

信じるもののため、険しき道に踏み出す勇気がありますか？

——赤。

絨毯に染み込んだ鮮血は、そこに倒れビクリとも動かない人間から止めどなく溢れているもの。そのうち三人の男はすでに絶命しているのか、虚ろな瞳は瞬きに閉じることもない。

「殿下！」

追跡をもう一人に任せ、王太子の部屋に残っていた護衛兵士が、叫びながら部屋の主と思われる青年に駆け寄った。目を閉じ、身動きもしない青年——王太子ユリウスの手を取った彼は、次の瞬間、悲痛の表情を驚きに変える。

「生きてらっしゃる！ 殿下、お気を確かに！」

この異様な状況に呆然としていたルーナやリュシオンたちも、兵士の言葉に我に返った。すぐさま王太子に駆け寄ったルーナは、血で汚れた絨毯の上に躊躇うことなく膝をつく。

「何を……!？」

彼女が血の気を失った王太子の身体に手を翳すと、兵士は戸惑いつつも鋭い調子で止めに入った。ルーナが逃げた賊——カインの名を呼んだため、警戒心を抱いているらしい。

しかし彼女はその制止に対し、強い調子で言い放つ。

「何って治療です！ 早くしないと手遅れになっちゃう！」

「しかし……」

ルーナは躊躇う兵士に構わずぐさま、へ治療の魔法語を唱えた。それと同時に彼女の手が淡く光り、そのあたたかく柔らかい光は王太子の傷へと吸い込まれていく。

「これは……」

兵士は目の前の光景に驚きの声を漏らした。王太子の身体から噴き出ていた血が止まり、目を背けたくなるような酷い傷口が見る間に塞がっていくのだから無理もない。

「ルーナはまだ幼いが、白魔法の腕は確か。安心して任せて大丈夫だ」

後ろからかけられた隣国の王太子の声に、兵士は無言でうなづく。少なくともルーナが王太子を助けるために必死なのは疑いようもないのだ。

彼女に対する警戒が完全に解かれたわけではないが、治療をやめさせるのは、王太子のكارろうじて繋がっている命の糸を切り捨てる行為だとわかったのだろう。

兵士は静かに立ち上がると、自身を落ち着かせるように大きく深呼吸し、改めて周りの様子に目をやった。

血を流して倒れているのは王太子を除いて三人。赤地に金の縁取りが施された制服を着ているた

め、王族の警護を務める近衛兵士だとわかる。

彼は斃れている近衛兵に近づくと、開いたままの目をそっと閉じてやった。そして残りの二人の死も確認すると、ドアの方を振り返る。そこには青ざめながらも成り行きを見守っている家令の姿があった。

「家令殿、宰相閣下に急ぎ報せを！」

「は、はい！ かしこまりました」

護衛兵士の言葉で、家令はすぐさま踵を返すと足音を響かせて駆け出して行く。

一方、必死に魔法治療を続けるルーナへ、リュシオンと共に治療を見守っていたジーンが声をかけた。

「ルーナ、どう？」

心配そうな兄の問いかけに、ルーナは眉間に皺を寄せる。

「傷は癒やすことが出来たの。でも、失った血が多すぎる……」

言い終えたルーナはぎゅっと唇を噛みしめ、目を閉じたままの王太子を見つめた。彼女の治療のおかげか、先ほどまで苦悶の表情を浮かべていた彼が、今は安らかに目を閉じている。

「危険な、状態……のですか……？」

おずおずと口を出す兵士に、ルーナは一瞬苦しげに顔を歪めた後、こつくりとうなずいて顔を伏せた。

「……とりあえず、王太子殿下には別室へ移動していただきましょう。ここでは落ち着いて治療も

できません」

重苦しい空気を破るかのように、ジーンが提案する。護衛兵士はそれに同意すると、王太子の身体を慎重に抱き上げた。

「ルーナ。君は彼について行って、王太子殿下の治療を継続するように」

「そうだな。とりあえず医師か白魔法使いが来るまで、出来る限りのことをしてくれ」

ジーンとリュシオンにそう言われてうなずいたルーナは、王太子を抱えた兵士に付き添って部屋を出て行く。

その場に残されたリュシオンは、部屋の惨状に改めて目をやると大きなため息をついた。

「ルーナが〈治癒〉に専念してくれていて助かったな……その前はショック状態だったし、さほど部屋の状況など目に入っていなかっただろう」

「ええ。こんなものをまともに目にしたら、きつとあの子の心の傷になります」

血と屍しかばね。出来ればルーナには一瞬たりとも見せたくない光景だ。

リュシオンは顔を顰しかめて室内を見やるジーンの肩に手を置く。

「ジーン、俺はルーナの方に行く。おまえはそろそろ駆けつけてくる兵士の対応を頼む」

「わかりました」

軽く一礼するジーンにうなずくと、リュシオンは難しい顔のまま、惨劇の部屋を後にした。

+

護衛の兵士によって近くの客間へと運ばれた王太子は、すぐさま寝台に横たえられた。

斬られたせいでざつくりと破れた衣服は、血に染まり無残な様相を呈ていしている。しかしそれとは裏腹に、そこから見える王太子の身体には醜い傷口などついておらず、うっすらと肌が赤くなっているだけだった。

「魔法の力というのは、すごいな……」

寝台の横で王太子に治癒魔法を施し続けるルーナを見て、兵士は思わずといった様子で口にした。サンクトロイメという世界には魔力マナを持つ人間が多く存在するが、魔法使いになれるほどの魔力を持つ人間は少ない。

そんな中、ルーナやリュシオンが生まれたクレセニア王国は、古くから才ある魔法使いまほうつかいを重用して身分を与えてきた。さらにそういった家の者同士が婚姻を重ねた結果、貴族階級に優秀な魔法使いが多く現れることとなった。

そのような特殊な国を除き、多くの国では高位の魔法使いは王家で抱えているほんの数人というのが普通だ。

しかも市井しせいの魔法使いには、中位どころか、魔法使いと名乗るなどおこがましい者も多く、人々が頼るのはもっぱら特定の魔法効果を付加した魔道具まどうぐの方なのだ。そのため彼らは魔法の便利さを認識しつつも、あてにすることはない。

エアデルトでも状況は同じであり、王宮に仕える兵士といえども高位の魔法治療を目にしたのは

初めてだったのだ。

「確かに傷は癒やすことが出来ました。でも……」

「あの大量の出血が問題……なんですね」

ルーナの言葉を引き継ぐように言った護衛兵士に、彼女は無言で小さくうなずく。傷がなくなつたとはいえ、王太子の顔は青白く、その呼吸は弱い。安心できる状況ではないのはい目瞭然だった。

医師や薬師（やくし）が施す治療と、魔法治療との大きな違いのひとつに、その即効性が挙げられる。

例えば治療をするのが医師の場合、酷い傷を負った患者には、傷口の縫合などの処置が施される。その後経過を診（み）つつ治療を続けることになるが、結局のところ傷を治すのは人が本来持つ自然治療力であり、時間だ。

しかし魔法治療は違う。術者の魔力でもって思うがままに身体に干渉し、止血をしたり傷口を塞いだり、さらには治癒力を高めて文字通りその場で傷や病を癒やしてしまうのだ。そのため本来必要な、傷を治すための時間は短縮されることになる。

けれど万能に思われる魔法治療であっても、失ったものを取り戻すことは不可能だ。ゆえに出血多量になれば手遅れになる場合もあるし、その他にも手の施しようのないほど進行した病気の治療や、無くした手足、壊死（えし）した患部などの復元も不可能なのだ。

ルーナは複雑な表情の護衛兵士にそれ以上何も言えず、持っていたハンカチで血で汚れた王太子の顔を拭いた。

そんな中、唐突に部屋のドアが開く。ルーナと兵士がハッと目を向けると、そこには厳しい表情のリュシオンが立っていた。

「彼の様子はどうか？」

「傷は癒やせたよ……」

自分の質問に口ごもるルーナを見て、リュシオンは小さく嘆息する。

「やはり血を流しすぎたせいかな。せめて意識が戻るといいが」

「うん……。どうにかして気づいてくれれば……」

寝台の横で、心配そうに青白い王太子の顔を見下ろすルーナに近づき、リュシオンは慰めるように彼女の頭に手を置いた。

ルーナはその気遣いに慰められつつも、胸中で悲痛な思いを巡らす。

（どうしてこんなことになったんだろう……。これはカインがやったこと？ ううん、違うよね。カインはこんな酷いことするような人じゃないもん。でも、もしかして彼にはこうする正当な理由があったとか？ わからない、わからないよカイン……）

考え込むルーナの耳に、ふと大人数の慌ただしい足音が届く。だんだんと大きくなるそれに不安を覚え、彼女は隣に立つリュシオンへと目を向けた。

「家令の報（ほう）せが届いたようだな」

彼がそうつぶやいたと同時に、大きな音を立てて部屋のドアが開けられた。

最初に室内に駆け込んできたのは、エアデルト王国の宰相（さいしやう）であるニール侯爵。そのすぐ後に、護

衛と思われる数人の兵士がなだれ込んできた。

「ユリウス殿下！」

ニール侯爵は寝台に横たわる王太子に気づくと、その名を叫んで駆け寄った。

「何故このようなことに……」

寝台の端に手を置き、苦しげに項垂れるニール侯爵のつぶやきに、王太子を部屋に運んだ護衛兵士が口を開く。

「不審な物音を聞いて我々が駆け込んだ時には、すでに王太子殿下は血塗れで床に倒れられておりました。護衛していたはずの近衛兵も同じように倒れており、その場には賊と思われる十代後半、いや、半ばと思われる少年が血塗れの剣を持って立つておりました」

「少年!？」

聞き返す侯爵にうなずき、兵士はさらに続ける。

「はい。成人もしていないような年頃の少年です。我々に気づくとテラスから庭へと逃走しましたので、一緒にいた仲間が後を追いましたが……」

そこまで言ったところで、開いたままのドアからジーンと共に、カインを追って飛び出した件の兵士が現れた。

「申し訳ございません。賊を取り逃がしました」

兵士たちの口から出る『賊』という単語に、ルーナはギョツとドレスの胸元を掴んで唇を噛む。

(このままじゃ、カインは王太子様を襲った賊にされてしまう。でも、あの状況を説明できる人は

誰もいないし……)

リュシオンを交えてニール侯爵に状況説明を続ける兵士たちを横目に、ルーナは途方に暮れながら目を閉じたままの王太子をぼんやりと見つめていた。

王太子に助かってほしいという思いに偽りは無い。でもその中には、真実を語れるのは彼しかないから、という思惑もあるのだ。そんな考えを持ったことに自己嫌悪を感じつつ、それでもルーナは彼の回復を祈る。

『……ルーナ』

不意に聞こえてきた『声』に目を向けたルーナは、そちらを見て小さく微笑む。他の誰に見えなくとも、彼女の目にはしっかりと四、五歳ほどの愛らしい幼女の姿が映っていた。

「風姫さん」

ルーナがその名を口にすると、風姫はホッとしたりするように顔を綻ばせる。彼女はルーナの手を両手で握り、慰めるように撫でさすった。

その仕草に「ありがとうね」とルーナがつぶやくと、風姫はうなずいて彼女の手に頬を寄せる。

『この者の生氣はあまりにも儂い。このままでは目を覚ますかどうか……』

風姫の言葉を聞き、ルーナは思わず顔を歪ませた。

精霊は嘘をつかない。彼女の言葉はルーナに残酷な現実を突きつけるものだった。

「出来るだけのことでしたけど……でも、それじゃ足りないの」

苦しげなルーナの声に、風姫はふうっと息を吐いて口を開いた。

『ルーナ、神木の実を知っておるか？』

「神木の実？」

風姫の口から出た聞き慣れない単語を、ルーナは無意識に繰り返す。

『そうだ。昔聞いたことがある。神域にて守られる神木になる実。その実を聖なる水に浸せば、どんな病や怪我をも癒やし——消えゆく命さえ引き戻す妙薬となるという』

「そんなものがあるの!？」

ルーナは思わず叫び、それから慌てて口に手をやって周りの様子を窺った。しかし彼女の心配を余所に、室内にいる者たちに気づいた様子はなかった。彼女は風姫がその力で自分たちの会話を周りに隠してくれていることを思い出し、ホッと息をつく。

『うむ。妾たち風の性を持つものは、ありとあらゆる場所に存在する。それゆえにかの実についても聞いたことがあるのだ』

「場所はわかるの？」

おずおずと尋ねるルーナに、風姫は深くうなずいてみせる。

『正確な位置となると近づかねばわからぬが、神域があるという場所はわかるぞ。ジャスディール山脈の北にある霊峰ロズワルドだ』

「霊峰、ロズワルド……」

『そうだ。妾はなんでも知っておるであろう？』

ルーナがロズワルドの名を口にする、風姫は何かを期待するようにココココとうなずきルーナ

を見上げた。

「す、すごいね」

あまりにもあからさまな「褒めて」の眼差しに、ルーナは顔を引き攣らせつつも風姫の頭を撫でてやる。

『ふふふ、妾にはそのようなことどうでも良い。だから普段は気にもせぬのだが、ルーナが知りたいたとなれば話は別だ』

ふふんっと胸を反らす風姫に、ルーナは苦笑するしかない。

(こんなすごい話がどうでもいいんだ……。あ、でも精霊に病気ってなさそうだし、そう考えると神木の実は彼らにとってまったく無用のものってことなのかな)

何はともあれ風姫からもたらされた情報は、ルーナの胸に希望の灯を点けた。

「わたし、それを宰相様たちに教えてくる！」

勢い込んで言ったルーナは、リュシオンやジーンを交えて話し合いを続けているニール侯爵へ近づく。侯爵は傍にやってきた彼女を不思議そうに見ながらも微笑んだ。

「どうかしたのかな、お嬢さん」

話を聞こうと屈んでくれた侯爵と視線を合わせ、ルーナは口を開く。

「お話があります、宰相様」

「話？」

ますます不思議そうに尋ねるニール侯爵に、ルーナは静かに「はい」とうなずいた。



「王太子殿下の傷は癒やすことができました。けれど失った血は戻ってこず、このままではいつ容態が急変するかわかりません」

「うむ」と相槌を打つ侯爵へ、ルーナはさらに言葉が続ける。

「でも、あるものさえ手に入れば、王太子殿下を救うことができると思うのです」

「あるもの……？」

とりあえず聞いておこうといった様子だった侯爵は、ルーナの言葉を繰り返すと鋭い眼差しを彼女に向けた。しかし彼女は怯むことなくそれを受け止め、真剣な表情でうなずく。

「はい。『神木の実』という神域の木になる実です。それには怪我や病を癒やすだけでなく、どんなに弱った身体でも回復させる力があるのです」

ルーナが一気に言い終えると、周りの兵士たちも「おお」と声をあげる。

王太子の容態が予断を許さないものであることは、普段怪我を見慣れている軍人であれば察することが出来る。それゆえ皆、顔には出さないものの悲痛な思いでいっぱいだったのだ。だが、彼女の言葉はそんな彼らに希望を与えてくれた。

「そんな話は聞いたことがないが、本当なのか？」

期待を隠さない兵士たちを横目に、ニール侯爵はまるで狙いを定めるように片目を細めてルーナを見つめる。

「本当です。どうか信じて下さい！」

胸の前で両手を組み真剣な表情で訴えるルーナの前に、侯爵は思案するように顎に手をやった。

（殿下を救う手立てがあるのなら飛びつきたいのは私も同じ。しかし『神木の実』などという秘薬は聞いたことがない……）

縋りたいと思いつつも、そんな怪しげな話を頭から信じる事が出来ず、ニール侯爵は眉間の皺を深くする。そんな彼へ、今まで黙っていたリュシオンが声をかけた。

「ニール侯爵、彼女の言うことは本当だ。エアデルトでは馴染みのない話かもしれないが、我がクレセニアではよく知られている。……そうだな、ジーン」

ジーンは唐突に話を振られたにもかかわらず、落ち着いた様子で「はい」と神妙にうなずいた。クレセニアの王太子と公爵令息が断言したことで信憑性は一気に高まり、その場にいた者たちは喜色を濃くする。

そんな中、一人だけ驚きに固まっていたのは、他でもないルーナ自身だった。

（リュウも兄様も、神木の実なんて知らないよね？ だって今、風姫さんが教えてくれたばかりの話だもん。ってことは、皆を信じさせるために咄嗟に言ってくれたのかな……）

ルーナは二人のフォローに感謝しつつ、ニール侯爵へもう一度強く訴えかけた。

「どうかお願いします。なんだったらわたしが神木の実を探しに行きます！」

「おいつ！」

「ルーナ!?」

飛び出したルーナの言葉に、リュシオンとジーンは思わず声を張りあげる。

「駄目に決まっているだろう。おまえがそこまでする必要がどこにある！」

「そうだよ。探しに行くって簡単に言うけれど、神域というからは人の寄りつかない場所だろう？ 街道を外れただけで盗賊や魔物の数も多くなるんだ。そんな旅にルーナがついて行っても足手まといにしかないよ」

二人の正論に口を噤む彼女に、侯爵はふつと口元を緩めるとその頭に手を置いた。  
「貴女の気持ちはわかりました。秘薬の話、前向きに検討いたしましょう。ですが貴女自ら赴く必要はございませんよ。エアデルトにも優秀な者はおりますので」

ルーナの気持ちとを和らげるためか、ニール侯爵が片目を閉じてそう言った。頭から否定されなかったことにホッと、彼女も素直にうなずく。

侯爵がそんな彼女の頭を再度撫でたところで、一際大きなざわめきが聞こえてきた。

「どうやら、王妃陛下がお出でなのでしょう」

侯爵のつぶやき通り、それからすぐに護衛の近衛兵士のみならず、文官まで引き連れたエアデルト王妃ロウイーナが現れた。

「ああ、ユリウス。どうしてこんなことに……」

王太子重篤の報に駆けつけた王妃は、そう嘆きの声をあげながら寝台へ駆け寄る。そして息子の青白い顔を見つめ、その冷たい手を両手で包み込むとキッと鋭い眼差しを室内に向けた。

「一体誰がユリウスを！」

感情のままに叫んだ王妃は、そこで初めて隣国の王太子に気づいた。

「リュシオン殿下……？」



彼女は訝しげにつぶやいた後、次にその場にそぐわない幼い少女——ルーナに目をやり、不快さを隠すことなく細い眉を吊り上げる。苛立ちのまま口を開こうとする王妃に気づいたのか、ニール侯爵が先手を打つように話し始めた。

「王妃陛下、こちらのリュシオン殿下とお連れの方々ユリウス殿下をお救い下さったのです。リュシオン殿下、我が国の王太子殿下を救っていただきましたこと、誠に感謝の言葉もございません」

丁寧に頭を下げたニール侯爵は、王妃が口を噤んだのを確認し、さらに続ける。

「ですが……これ以降は私どもの領域。ご無礼は重々承知しておりますが、どうか速やかにお引き取り下さるようお願い申し上げます」

彼は丁寧に、だがきつぱりと、これ以上の干渉は無用とリュシオンに示してみせた。

「わかつている。我らはこれにて退出させてもらおう」

侯爵の言う通り無礼とも取れる言葉だったが、リュシオンは気にすることなくそう返す。そして口を出すきっかけを失っていた王妃の前に立った。

「王妃陛下。このような状況ゆえ、どうか不作法をお許し下さい」

彼は優雅な所作で腰を折ると、差し出された手の甲に作法通り唇を近づける。

隣国の王太子が非の打ち所のない立ち居振る舞いで礼を尽くしたことにより、王妃の険しい感情も少なからず収まったようだ。

「わかつております。リュシオン殿下にはこちらこそ正式に礼を述べねばならぬところですわ」

そう返す王妃に、リュシオンは輝くような笑顔を見せて首を横に振った。

一方ルーナはそんな彼を見上げながら、常では絶対にはありえない愛想の良さに啞然としていた。  
「……誰？　ちよ、これ誰!?」

思わず心の中で叫んだルーナだったが、リュシオンはにっこりと微笑んだまま彼女の肩をそっと押す。

「それでは我々はこれで失礼させていただきます」

「かしこまりました。君たち、殿下方をお送りしなさい」

ニール侯爵は退出しようとするリュシオンへ頭を下げ、後ろに控える護衛兵士へ声をかけた。

リュシオンはルーナとジーン、そして数人の護衛を伴って部屋を出ると、その瞬間、先ほどまで貼り付けていた満面の笑みを消した。

「リュウ……顔、戻ってるよ」

皮肉げな半目のルーナが小声で指摘すれば、リュシオンは先ほどまでのやり取りを思い出したのか不機嫌な顔で彼女を見下ろす。

「いつまでも愛想笑いを振りまけるか」

「でも振りまいた甲斐はありませんよ」

ジーンは身もふたもない友人の言葉にクスクスと笑って言った。二人のやり取りを聞き、ルーナはやっとリュシオンの機転に気づく。

「ひょっとして、わたしのため？」

ポツリとつぶやいた彼女に、凶星を指されたリュシオンは苦く顔を顰めた。

王太子が賊に襲われて重体などという事態は、いくら友好国とはいえ知られたくない事実のはず。下手をすればそれを隠すため、エアデルト側から口を封じられることも考えられるのだ。

リュシオンとジーンはその身分によって守られている。けれどルーナは、高名なレングランド学院院长とはいえ、貴族としては下位に当たる男爵の娘ということになっており、その程度の身分であれば国として排除を躊躇うことはないだろう。だからこそリュシオンは、ルーナから王妃の関心を逸らすべく、あのような行動に出たのだ。

「リュウ、ありがと」

小さく礼を述べるルーナの頭に手を置くと、リュシオンはいささか乱暴にかき混ぜる。そして髪を乱され「もう」と口を尖らせるルーナを見下ろしながら、彼は王妃から彼女を庇うように口を挟んだ侯爵のことを思い出した。

（あれだけで王妃が誤魔化されてくれるとは思えないが、少なくとも宰相の方はルーナをどうしようとは思っていないようだ。なににせよルーナが巻き込まれる事態にならないと良い……いや、違うな。ルーナが自ら首を突っ込んでいかないといいんだが、だ）

自分を見てため息を零すリュシオンに、ルーナは首を傾げつつもムツとするのだった。

十

城内にある客室に戻ると、リュシオンは護衛としてついでにきた兵士に目を向けた。

「こいつに少し話がある。また呼ぶから、しばらく下がっていてくれ」

そう言いつけて、彼はルーナの手を取り室内に足を踏み入れる。ジーンもその後につき、後ろ手にドアを閉めた。

ルーナはリュシオンに手を引かれ、窓際に設えられたテーブルセットへと誘導される。そこにはオーク材で出来た猫足のテーブルを中心に、四脚の椅子が置かれていた。

リュシオンはさっさと椅子の一つに腰を下ろすと、立ち尽くすルーナにも斜め横にある椅子へ座るように促す。おやおすと彼女が従うのを確認したジーンは、盗聴などを防ぐ〈結界〉を張った。

「さて、色々説明してもらおうか？」

リュシオンは、ジーンが自分の対面にある椅子に腰を下ろしたところで口火を切る。

「色々……」

困惑したようにルーナがつぶやくと、ジーンはクスリと笑って助け船を出した。

「まずは『神木の実』のことからかな」

二人の真剣な眼差しに焦りながら、ルーナはどう説明するべきか俯いて考え込む。するとそんな彼女を助けるように、唐突に風姫が現れた。

彼女はルーナの膝に凭れかかるようにして抱きつくくと、悪戯っぽく笑って提案する。

『妾からと言わずに、しいれぐからと言っておけば良いのではないか？ こやつらはアレらの本性を知っておるのだから納得するであろう』

「うむ、この場合はそれが一番良いだろう」

「たまには風の者も良い提案をする」

シリウスとレグルスも同意を示すが、なにぶん一言余計だ。すぐに風姫がキッと目を吊り上げる。

『たまにはとは何じゃ！ 妾を愚弄する気か！』

「ふっ、本当のことであろう？」

「うむ、間違いないな」

テーブルの下で「まあまあ」とそれぞれ手を添えて睨み合う守護者たちを宥めた後、ルーナは風姫の提案に乗って話し出した。

「あのね、しいちゃんどれぐちゃんから聞いたことがあるの」

ルーナの言葉に、リュシオンとジーンは無言のままうなずき、先を促す。

「ジャスディール山脈の北にある、霊峰ロスワルドには神域と呼ばれる場所があって、そこには神世の時代からある聖なる木——神木があるんだって。神域の正確な場所は近づいてみないとわからないみたいなんだけど……」

「神域か……」

ルーナの説明に、リュシオンが小さくつぶやいた。そして二人の反応を心配げに見ている彼女へ、ジーンは安心させるように微笑む。

「神獣の言ともなれば、十分に信頼できる話だよ。ただ、エアデルトの人たちは彼らの正体を知らないわけだし、それを説明せずに納得させるというのは難しいだろうね」

「そうだな。さっきは咄嗟にクレセニアに伝わる話だと説明したが、良い判断だったかもな」

ジーンの言葉を受け、リュシオンは苦笑しつつそう返した。

（そうだよ。ていうか、よく咄嗟にフォローしてくれたよね。それってわたしの言葉を無条件に信用してくれてるってことだし）

「あの、リュー」

「なんだ？」

ルーナは遠慮がちにリュシオンを呼ぶと、ペコリと頭を下げる。

説明を受けたわけではないのに、自分の言葉を信用し、さらに他の人間を納得させるためにフォローしてくれたリュシオン。ルーナは改めて彼の思いやりに深く感謝すると同時に、胸があたりかくなるのを感じた。

「今さらだけど、さっきはありがとう。リューや兄様がそう言ってくれなかったら、ニール侯爵も絶対信用してくれなかったと思う」

「いくらおまえでも根拠もなく、あんな話はしないからな」

「そうですね。それに与太話と聞こえるような話も、ルーナが口にしたら本当かもしれないと思ってしまいますからね」

リュシオンとジーンの前、寝ているのか貶しているのかわからない言葉に、ルーナはガクッと肩を落とす。すると彼女の膝がトントンと叩かれた。

（風姫さん？）

ルーナが風姫へ目をやると、彼女は親指をグッと突き出して満面の笑顔を見せる。

『さすがはルーナだ！ 完璧に信用されておるではないか！』

リュシオンたちの言葉をなんの疑いもなく褒め言葉と取った風姫は、キラキラと輝く目をルーナに向けてきた。

(……うん、ここは風姫さんの言うように良い方向に取っておこう)

ルーナは「ありがとう」と感謝を込め、テーブルを目隠しにして風姫の頭を撫でてやる。

少しの間ルーナの膝に頬をのせて甘える風姫に和んだ後、彼女は顔を上げてリュシオンを見た。すると先ほどとは一変して難しい顔になっている彼が目映る。

「リユー？」

ルーナが心配そうに声をかけると、リュシオンは眉間に皺を寄せたまま口を開いた。

「いや、その話が元でややこしいことにならなければいい、とな……」

「ええ。先ほど侯爵がおっしゃったように、自国のことだからと自分たちで対処してくれれば問題はないのですが……」

ジーンはリュシオンの言葉にうなずきながら、表情を曇らせる。

「まあとにかく、神木の実については、先ほどの通り押し通すぞ」

「わかりました。こうなつては今さらルーナの身分を明かしても不信任を煽るだけですし、隠し通した方がよさそうですね。でもそうになると、リュシオンや私に比べてルーナは後ろ盾が弱い分、危険ですが」

困ったとばかりに眉尻を下げるジーンにうなずいた後、リュシオンはルーナとしつかり視線を合わせて言った。

「マティス卿には話しておくが、これからは俺やジーンと常に一緒にいる方がいいだろう」

「うん……」

困惑しつつうなずくルーナに、今度はジーンが声をかける。

「いいかいルーナ。しばらくは大人しくしているんだよ？」

「はい、兄様」

ジーンは神妙にうなずくルーナを、それでも心配そうに見つめていた。

このような重大事であれば、本当の身分を明かしても良かったかもしれない。しかし今の状況では、王太子を害するという目的があったから身分詐称をしたと思われかねないのだ。そうなれば、たとえ公爵令嬢であっても追及は免れないし、下手をすれば外交問題に発展してしまう。

「大人しくしてるし、きつとこんな子供のことなんて誰も気にしないと思うよ」

安心させるようにルーナが言うと、ジーンは「そうだね」と優しく笑う。

「本当にそうだといんだがな……」

兄妹のやり取りを見ながら、リュシオンは祈るように小さく独りごちた。

ルーナたちが退出してすぐ、王太子が眠る部屋に侍医と白魔法使いが駆けつけた。診察のために寝台の上掛けをめくった彼らは、その有様に息を呑む。

「これは……」

斬りつけられたと思われる衣服の破損部分の大きさと、染みついたそのおびただしい血の量に、侍医は思わず声をあげ、白魔法使いも顔色を変えた。

侍医はその動揺を無理矢理抑え込むと、王太子の着ているシャツをたくし上げた。

「なんと……!」

声をあげたのは、今度は白魔法使いの方だった。

王太子の身体には傷口らしい傷口はなく、ただうつすらと赤みを帯びた線が肌に残っているだけだったのだ。シャツの破損部分と範囲が一致することから、かろうじてそれが剣で斬られた痕だとわかる。彼はこれだけの大きな傷が完璧に治癒していることに驚愕していた。

「血を拭き取ったような跡があるのですから、確かに傷口は存在したはず……」

侍医がそう口にするのと、ハツとしたように室内に残った護衛の一人が進み出た。

「殿下のお怪我ですが、リュシオン殿下がお連れになっていた少女が魔法治療を施したのです」

「魔法治療ですと?」

白魔法使いが勢い込んで聞き返す。兵士は真面目な表情でうなずくと、自分が見た治療の様子を語った。

「……なるほど。それなら納得できますな」

「どういふことだ?」

白魔法使いが王太子の身体に手を翳しながらしきりにうなずくので、ニール侯爵は焦れたように問いかける。

「診たところ、傷口だけではなく傷つけられた筋肉や血管、おそらく神経などもすべて完璧に修復されております」

白魔法使いが説明すると、それまで黙っていた王妃が声高に叫んだ。

「完璧ですって? ならば何故ユリウスはこんな青白い顔なのです! 治っているのならば何故目を開けないのです!!」

「王妃陛下! 落ち着いて下さい」

ニール侯爵が王妃に声をかけるが、彼女は普段の冷めた様子からは想像できないほど激昂しており、彼の言葉など耳に入っていないようだった。

「ああ、ユリウス! この子は王になるのです。こんなところで死ぬなどあつてはならない。一体誰が……誰がこの子をこんな目に……護衛は何をしていたのです! 賊は捕まえたのでしょうか!」

「陛下、それについては後ほど……」

同席している近衛兵士や侍医、白魔法使いにそのような重大事は聞かせまいと、ニール侯爵は王妃を宥めようとするが、取り乱した彼女にその気遣いがわかるはずもなかった。

「今すぐ、この場で説明なさい！」

高飛車に命じられ、侯爵は諦めたように先ほどの兵士へと説明を促した。

兵士は王妃に深く頭を下げると、そのままの状態です所属と名前を告げる。

「頭を上げて、知ってることを早く話しなさい」

侯爵に言われた通り頭を上げた兵士は、鋭く見つめてくる高貴な女性に内心怯みつつ、自分が駆けつけた時の様子を語り出した。

「――駆けつけた時にはすでに殿下は倒れられており、その場には賊と思しき少年が、血の付いた剣を持ったまま立っておりました。賊というには不似合いな十代半ばほどの少年です。彼が逃走を図ったため、一緒にいた仲間の兵士が後を追いました」

「それで賊は捕まえたのね？」

否定は許さないとばかりの質問に、説明している兵士と追跡した兵士が青ざめる。その様子で答えがわかったのだろう。王妃は手に持っていた扇を兵士の顔に向けて投げつけた。

繊細な絹の扇がバシッと大きな音を立てて兵士の頬を打つ。王妃は彼の赤くなった頬を気にすることもなく、苛立たしげにまくし立てた。

「たかが賊一人を取り逃がすとは情けない。それで我が国の兵士といえるのかしら……その上、手がかりすら見つけれなかったというの？」

屈辱的な仕打ちにも耐えていた兵士だったが、王妃の最後の言葉にハッと顔を上げた。

「何か、気づいたことでもあるのか？」

ニール侯爵が声をかけると、彼はおずおずと話し出す。

「実はリュシオン殿下が伴われていた少女なのですが、賊と思われる少年を見た瞬間、『カイン』と叫んだのです」

「なんですって？」

顔色を変えて叫んだ王妃に、その場にいた全員が注目する。

「陛下、その名に何か心当たりが？」

すぐに侯爵が尋ね返すと、王妃はその探るような眼差しから目を逸らして答えた。

「賊に心当たりなどあるわけではないでしょう！ そんなことより、名を呼んだのならばその娘……賊の一味ということではないの」

決めつけるような王妃の物言いに、兵士は慌てて口を挟む。

「いえ、それはありません。彼女はマティス卿の娘ですし、何より瀕死の重傷を負っておられた王太子殿下を必死に治療して下さったのですから」

「マティス卿の娘だからなんだというのです。王太子の怪我を治したのも自分が疑われることを恐れてかもしれない。ニール侯爵、その者を早速尋問しなさい」

冷たく言い放った王妃だったが、ニール侯爵は緩やかに首を振った。

「幼い少女のこと、相手も少年となれば、賊とは知らずどこかで偶然に知り合っていたのかもしれ



ません。なんにせよ彼女が王太子殿下を救ってくれたのは事実です。その恩人を徒に尋問するのはいかなものでしょうか？」

「ですからそれは、自分の身を守るために治療らしいことをしたというだけの話でしょう。だからユリウスは目を覚まさないのよ」

王妃はなおも頑なに言い募ったが、今度は王太子を診察していた侍医と白魔法使いから反論されることになった。

「恐れながら王妃陛下。王太子殿下のお怪我は、傷痕から見えていい加減な治療で回復するような軽いものではございません」

「侍医殿のお言葉は偽りではございませんぞ。王太子殿下が弱っておいでなのは血が足りぬからです。治療魔法をもつても失った血は戻りませぬ。ですがもし治療を施していなかったとすれば、今頃は間違いなく殿下のお命はなかつたことでしょう」

二人の真摯な言葉に、これ以上押ししても無駄と悟ったのか、王妃は渋々とうなずく。

「その娘がユリウスをきちんと治療したことはわかりました。だが、この子が未だ危険な状態であることには変わりない。それを脱しない限りは娘を完全に信用するわけにはいきません」

彼女は不満も露わにそう言い、反対意見を述べた面々を苛々と睨みつけた。

「陛下、そのことなのですが……」

ニール侯爵が宥めるように穏やかな口調で話しかけると、王妃は厳しい表情を崩さぬまま、顎先をすくって先を促す。

「実は先ほど、件の娘より興味深い話を聞いたのです」

「興味深い話？」

「ええ。クレセニアの古い伝承によると、どんな怪我や病も癒やす秘薬というものがあるらしいのです。それを王太子殿下に差し上げればきっと回復するだろうと」

「なんですって？」

最初は鼻白んだ様子で聞いていた王妃だったが、侯爵の言葉に身を乗り出すようにして尋ねる。

「なんでも、ある場所に存在する『神木の実』というものだそうです」

「そんなものがあるのならば、すぐに手に入れてきなさい」

息子が助かるかもしれないとの希望から、王妃は勢い込んで命じた。

「はい、そのためにも娘に詳しく話を聞く必要があります」

「ふん……ならばわかった。とりあえずその娘と賊の関係については不問としましょう。侯爵は娘から詳しい話を聞きなさい。……もつとも、その話が嘘ではないとよいが」

「それは大丈夫でしょう。神木の実についてはリュシオン殿下もご存知でした。それにあの娘は身の危険をかえりみず、自分が取りに行く時まで言ってくれました。自衛のための嘘であれば、自らを危険に晒すのは矛盾しております。そう考えれば王太子殿下を救いたいという言葉に嘘はないと思われます」

ニール侯爵が言い切ると、控えていた侍医が思い切ったように口を挟んだ。

「陛下。私共にこれ以上出来ることはございません。あとは殿下ご自身が回復されるのを待つしか

ないのです。……しかしこのまま目を覚まされなければ、容態は確実に悪化していくでしょう。その秘薬を差し上げられるのであれば、それに越したことはございません」

今最も優先させなければならぬのは、王太子の回復であるとわかっているのだろう。身動きもせず眠る王太子を見つめ、王妃は力なくうなずく。

「少し考えたい。わたくしはしばらくこの場を離れます。ニール侯爵、この件については後ほど使いをやります」

「かしこまりました」

ニール侯爵が了承すると、王妃はいささか疲れた様子で部屋を出て行ったのだった。

十

王太子が眠る部屋から自室に戻った王妃は、頰れるように刺繍の施された長椅子に座った。背もたれに肘を置き、こめかみを揉みほぐす。するとその時、控えめなノックの音が耳に届いた。

お茶の用意をしていた女官がドアを開けると、そこにいたのは一人の男。

鮮やかな緑の長髪を後ろでまとめ、赤紫の瞳に片眼鏡をかけたジャック・オリバレス子爵だ。

「良いところに来たわ、ジャック」

王妃の言葉で部屋に入ってきたオリバレス子爵は、「王妃陛下にはご機嫌麗しく」と恭しく一礼してみせる。彼女は彼の挨拶に皮肉げな笑みを浮かべると、黙って控えていた女官へ片手を振って

退出を命じた。

女官が出て行くのを見送った後、王妃は立ったままのオリバレス子爵に向かって口を開く。

「ユリウスの話は聞いているわね？」

「はい。襲撃に遭ってお怪我を負われたとか」

オリバレス子爵が淡々と答えると、彼女は不快そうに顔を歪めた。

「普段はその落ち着き払った態度を頼もしく思うが、今はただ腹立たしいわ」

「申し訳ございません」

子爵は深々と頭を下げるが、王妃の機嫌を損ねたにもかかわらず動揺は微塵も見られなかった。

彼女はそんな彼の態度に「まあいいわ」とつぶやいて話し始める。

「あの子は酷い怪我だったけれど、魔法治療のおかげでなんとか一命は取り留めたの」

「それは重畳」

「本当にそう思っているのならば、もっと嬉しそうにしたらどうなの？」

「申し訳ございません。今は容態も安定していると聞き及んでおりますゆえ、ちょうど安堵していただくでございます」

八つ当たりのような王妃の言葉にも、オリバレス子爵は無表情に返答する。

「ええ今は、ね。いつ容態が悪化するかわからないけれど。……それで、よ」

王妃はもったいぶるように言葉を止めた後、彼の目を見つめて告げた。

「ユリウスを襲った者は、カインという名の少年だったということよ」

さすがにこの事実には驚くだろうと思った王妃だったが、目の前の男は「ほう」と一言つぶやいただけだった。

「わかっているの!? カインは本物の——」

「王妃陛下。そのように興奮されては、女官たちが心配して飛び込んできますよ」

声を荒らげる王妃にオリバレス子爵が言い放つ。穏やかともいえるその声音は、しかし見えない威圧感をもって彼女を遮った。

王妃は冷たい水を浴びせられたように一瞬身を震わせると、やがて幾分冷静さを取り戻したのか大きく息を吐いた。その様子をじっと見つめていたオリバレス子爵は、彼女が落ち着いたのを見計らって口を開く。

「カインという名が出てきたということは、王太子殿下を害した者は自ら名乗ったと？ だとすれば随分間抜けな話ですが」

「いいえ、違うわ。偶然にもリュシオン殿下が連れていた娘と知り合いだったようで、その娘が賊を見て叫んだそうよ」

「ほう……知り合いと。それはまた随分と都合の良い偶然ですね。本当に偶然知っていただけだと？」  
それまで無表情だったオリバレス子爵は、少しだけ興味深そうに返す。

「確かに怪しいわね。でもその娘は陛下の治療のために訪問しているロドリゴ・マティス卿の娘。身分は男爵と低いものの、クレセニア王の覚えの良い人物。あれがかくまわれていた公爵家と面識があったとしても不思議ではないし、ここに来たのは偶然でしょうね」

「なるほど。単なる顔見知りだとすると、下手につつけば逆にこちらが不審感を抱かれることになるかねせんね」

「そういうことよ。それにあの娘が魔法治療を施してユリウスを救ったと聞いたわ」

「あのように幼い娘が魔法治療……」

オリバレス子爵が繰り返すと、王妃は彼の興味が引けたと思ったのか「ええ」と少しだけ気を良くして答える。そのため、彼が会ったこともないはずの娘を『幼い』と形容したことは気づかなかった。

「それからニール侯爵が言っていたのだけど、その娘、たちまちどんな病や傷も治してしまうという秘薬の話をしていらしいの」

「ほう、どんな病や傷ですか……」

今度はありありと興味を示した子爵の様子に、王妃はさらに機嫌を良くしてうなずいた。

「なんでもクレセニアに伝わるものらしいわ」

「ほう……しかしそのような秘薬ならば、もっと広く知られていてもおかしくないはずでは？」  
考え込むように言ったオリバレス子爵に、王妃は特に気に気にした様子もなく返す。

「そのような万能薬ゆえに、国外に知られないようにしていたのではないの？ 場合によっては政治的な駆け引きにも使えるわけだし。それに入手するのが非常に困難ということも考えられるわね」  
「ああ、なるほど。それはありますね」

「とにかくニール侯爵には、あの娘から詳しい話を聞くように言っているわ。もっともあの娘、自

分が取りに行ってもいいとか言ったらしいけど、適当なことを言つて逃げるかもしれないし、それほど信用ならないわ」

馬鹿にしたように言つた王妃だったが、次に子爵の口から出た言葉に目を瞠みはつた。

「おや、それは良い提案ではありませんか」

「何を……」

「娘の提案ですよ。国外の者に隠している話ならば、速やかに詳しい場所を教えて下さるとは思えません。かといつて入手するのに危険を伴うような秘薬を、おいそれと隣国の王太子に取つてきて下さいと頼めるはずもございません。ですが男爵令嬢ならばそれも可能。幼い娘に行つてもらうのだから、こちらから護衛を付けると言えばさほど問題はないでしょう」

オリバレス子爵の言葉に、王妃は考え込むように口元に手をやる。

「そうね、下位貴族ぐらい、途中で何かあったとしても本人が言い出したことでもあるのだから、さほど問題になるとは思えない。それに賊ぞくの名前を呼んだことを問い詰めれば、身の潔白を明かすという意味でも断れないわね」

「はい。街道を外れば魔物や盗賊も多いので、旅は恐らく危険を伴うものになるでしょう。となればやはり捨て駒こまに出来る人間を使うのが良いかと」

「ジャック……秘薬などというもの、大げさな嘘かもしれない。だがもし真実であるならば、わたしはユリウスにそれを使いたい」

静かに言い放つた王妃の顔は、ただ息子を救いたいという母親のもの。オリバレス子爵は彼女の

顔を見やり、ただ一言「御意ごい」と告げた。

十

王妃の部屋から退出したオリバレス子爵は、自身が滞在する客室に戻つてきていた。

彼は子爵という下位貴族ではあったが、王妃の側近という立場ゆえに王城でも上等な部屋が与えられている。

オリバレス子爵は暖炉近くに置かれた長椅子に腰を下ろすと、背もたれに頭を預け、ゆつたりと足を組んだ。

「隣国の王太子に、その連れの幼い娘。——さて、鼠ねずみはどこらか」

ククツと笑い声を漏らすと、彼は腹の上で両手を組んで目を閉じた。しばらくそのまま思いを凝こらしていた子爵は、唐突に開いた扉に気づいてゆつくりと目を開く。

「おまえか」

現れた人物に目を向け、オリバレス子爵は冷たく言い放つた。

彼の視線の先には、金茶色の髪に柔らかな茶色の瞳をした少年が一人。

エアデルト国王の庶子であり、近いうちに王族として迎えられると言われているヘクトル・レオン・ロセットだった。

エアデルト国王が病に伏しているため未だ正式には認められていないものの、すでに王城では公

然たる立場にある彼に対し、子爵の態度はあまりにも横柄なものだ。

しかしヘクトルはそんなオリバレス子爵の態度を咎めることなく、黙って室内に入ってくるると子爵が座る長椅子の横に直立した。

「王太子は一命を取り留めたようだな。……運の良いことに」

ふと零れたオリバレス子爵の言葉に、ヘクトルは何も返さない。そんな彼を気にすることなく、子爵はなおも独りごちる。

「まあ瀕死では邪魔にもなるまい。むしろ邪魔になるとすれば、あのわずかな痕跡を辿って入り込んできた鼠の方……」

オリバレス子爵はそこで言葉を切り、考え込むように口元に手をやった。

「どちらが鼠にせよ、今の状況では隣国の王太子に手を出すのは少々厄介か。ならばさしあたって小娘の方から排除するのが良策というもの」

彼はフツと口元を緩めると、傍に立ったままのヘクトルを仰ぎ見た。

「都合良くあの娘はここを離れることになっている。それに合わせて罫を張る。いいな？」

「御意」と短く返すヘクトルに、オリバレス子爵は軽く手首を振ってみせる。

まるで野良犬を追い払うかのような仕草だったが、ヘクトルはただコクンとうなずくだけだ。

そのまま黙って部屋を出て行く彼の表情は、やはりどこか人形のように無機質で冷たい。

残されたオリバレス子爵は、長椅子から立ち上がるとコンソールテーブルに近づき、そこに用意された葡萄酒をグラスに注ぐ。一気にグラスを傾けた彼は、赤い液体でうつつすらと唇を濡らしたま

ま、虚空に向けてつぶやいた。

「さて、次の準備を調べねば……」

エアデルト王太子が大怪我を負った翌日、ルーナの部屋にはニール侯爵が訪ねて来ていた。マホガニーのテーブルを挟んで二脚ずつ置かれた絹張りの椅子には、ルーナと侯爵の他に、目付役として押しかけてきたリュシオンとジーンの姿もあった。そして彼女の足下には、シリウスとレグルスが寝そべっている。

「あの……宰相様」

礼儀からいえば、身分の高い者が相手の場合、話しかけられるまで沈黙していなければならぬのだが、訊きたいことがあったルーナは恐る恐る切り出した。

「なんだい？」

怒った様子もなく優しく訊かれ、ルーナはホッとしつつ口を開く。

「……あの、王太子殿下のご容態はいかがでしようか？」

「ああ、今は安定しておられる。これも君のおかげだね」

ニール侯爵が安心させるように笑みを浮かべたので、彼女もホッと笑顔を返す。

「ただ、お命は助かったものの、やはりお身体はかなり弱っておられる。このまま意識が戻らないようなら危険と言えるだろうね」

「そんな……」

「そこまで予断を許さない状況なのか？」

絶句するルーナに代わりリュシオンが口を挟むと、ニール侯爵は固い表情のまま答えた。

「昨日あの場にいらっしやった方々には、下手な誤魔化しは不要でしょう」

侯爵はそう前置きしてから、おもむろに話し始める。

「ルーナ嬢の行った魔法治療は、我が国の白魔法使いも認めるほど完璧でした。だが失った血は多く、王太子殿下のお身体は衰弱しきつておいでなのです。このまま意識が戻らねば、恐らく殿下は……」  
言葉を濁すニール侯爵だったが、この場にその意味を理解できない者はいなかった。

（もしここに、日本のような医療設備があれば……）

侯爵の話聞きながら、ルーナは心の中で焦燥にも似た思いを抱く。

彼女の前世、高崎千幸が暮らしていた世界——地球。その日本という国であれば、生命維持に必要な医療器具や薬品が発達しており、意識不明の患者であつても命を繋ぐことは可能だ。

しかしここは、サンクトロイメという異世界。医療技術はまだまだ発展途上であり、代わりに魔法が存在しているものの、それも万能ではない。

白魔法によって生命力を高めることは出来るが、ほんの一次的なものであり、傷などを治す場合も、患部に術者の魔力を集中することによって患者の治癒力を高めているに過ぎない。

そのため意識のない人ひとりの生命維持ともなれば、魔法であつてもやはり限りというものがあつた。魔力は無尽蔵ではないし、治癒魔法を続ければ続けるほど術者の力は奪われていく。継続

的に治療を行うには、やはり患者の意識があること、すなわち食事などの栄養を患者自ら摂ることが重要になってくるのだ。

「そのような状況だからこそ、我々としては昨日貴女あなたが言っておられた話をぜひ詳しくお聞かせ願いたい」と、こうして参った次第です」

そう言っただけを合わせてくるニール侯爵に、ルーナは戸惑いつつ尋ねた。

「神木アンブレロシエの実、の話ですね……？」

「ええ。やはりエアデルトでは知る者のいない話だったので」

丁寧に頼み込む侯爵に、ルーナは助けを求めないようにリュシオンを横目で見る。

（わたしが適当に話してリュエーたちが話を合わせられなくなったらまずいよね？ どうしよう……）  
彼女の困惑を察したリュシオンは、「まかせろ」とばかりに小さくうなずくと、ニール侯爵に向けて口を開いた。

「侯爵の言う通り、エアデルトでは聞かぬ話だろうな。そもそもクレセニアの一地方に伝わる古い伝承だったそうなんだ。それが最近、魔法遺跡から見つかった書物が解読されたことにより、神木の実が伝説たの類いではなく、実在するものだとわかった」

「なんと……魔法遺跡の書物から、と」

驚きに目を見開く侯爵へ、リュシオンはもったいぶるように一拍置いて話を続ける。

「書物には場所についての記述もあり、それが言い伝えと一致していたことから、近々レングランドから調査団を派遣する話になっていたのだ」

リュシオンの言葉を補うように、ジーンが口を挟んだ。

「実は、その古い伝承が書かれた本がマティス卿の書斎に埋もれたままになっていたのを、偶然見つけ出したのが娘である彼女なんです。だから神木の実について咄嗟とつさに思い出せたんでしょね」  
ルーナは二人の良く出来た説明に舌を巻きながらも、自分の記憶の中から『魔法遺跡』についての情報を探し出す。

（魔法遺跡って、確か大陸でたまに見つかる古代魔法文明の遺跡だよな。びっくりするようなくらい魔法陣マジックサークルや、魔法陣なんかが発掘されたりするから、本国での発見の話はあまり公表されたいんだ。それならエアデルトに伝わってなくても納得してもらえよな……）

彼女がこっそり感心している横では、実際納得したらしい侯爵が何度もうなずいている。

「ただ調査については外交も関わってくるので、これから交渉を……というところだったのですよ」  
「外交問題という？」

ジーンが話を遺跡調査に戻して説明すると、侯爵は不思議そうに聞き返す。

「ああ。書物に記されていたのはエアデルト国内、ジャスディール山脈レ、マの北、霊峰レイ、マロスワルドだ」  
「ロスワルドですと!？」

リュシオンの口から出た本国の地名に、ニール侯爵は驚愕して叫んだ。そんな彼の反応を気にすることなくリュシオンはさらに続ける。

「もっとも場所はわかっているにしろ、神域というのは結界で守られているそうだから、そこに辿り着けるかどうか問題だな」

「結界、ですか……。では見つけられないという事態もあり得るということですね」

隣国の王子の言葉に冷静さを取り戻したのか、ニール侯爵は落ち着いた様子でそう確認した。

「ああ。だが、現地に行ってみなければ見つかる可能性も捨てることになるな」

リュシオンは淡々と答えると、あとは自分で決めるとばかりに言葉を切る。

「わずかでも可能性があるのならば、それを選択肢に入れぬ方が愚かでしょう」

「——ならば我々としても、出来る限りの協力はしよう」

ニール侯爵にリュシオンがそう答えると、侯爵は喜ぶどころか困惑したように眉尻を下げた。その様子にルーナも、そしてリュシオンやジーンも首を傾げる。

「どうかされたのですか？」

何かを言い淀んでいるかのようなニール侯爵に、ジーンが控えめに切り出した。しばらくして彼はようやく重い口を開く。

「実は王妃陛下より、『神木の実』を取りに行くのならば、ルーナ嬢を同行させるようにと命じられているのです」

「なんだと？ ルーナが赴く必要などないと言ったのはおまえだろう！」

「冗談が過ぎますよ、ニール侯爵」

ニール侯爵の言葉にリュシオンは思わず声をあげ、ジーンは不快そうに抗議する。一方、ルーナはただ目を瞠るばかりだ。

「残念ながら、冗談ではございませんぬ」

リュシオンとジーンの厳しい視線を真つ向から受け止めた侯爵は、表情を崩すことなくそう告げた。そんな彼に苛立ったようにリュシオンが怒鳴る。

「何故ルーナが行かねばならない！」

「そうです。どうしてルーナが同行する必要がある？ 王妃陛下は一体何を考えていらつしやるのです」

丁寧な物言いは崩さないものの、さすがにジーンも苛立ちを隠せないようだ。ニール侯爵は目を伏せて彼らの言葉を黙って聞いていたが、やがてゆっくりと息を吐き出すと視線を上げて話し始める。

「王太子殿下の襲撃があった折、ルーナ嬢は賊の名前を叫んだとの報告がありました。王妃陛下はそのことから、ルーナ嬢と賊との関係を怪しんでおられるのです」

「それは……」

言葉に詰まるジーンに、ニール侯爵は厳しい表情で続ける。

「たまたま、とおっしゃられればそれだけの話かもしれません。しかしルーナ嬢がこの城にいらつしやる間に王太子殿下が傷つけられ、賊は逃走。しかもその者の名前を叫んだとなれば、疑われるも当然のこと」

「確かにそうかもしれないが、ルーナに聞いたところ、あの者とはクレセニアの王都でたまたま知り合ったということだ。もちろんそのような賊であるなど知る由もなく、な」

リュシオンが幾分不機嫌そうに言うと、ジーンが後押しするように口を開いた。

「彼女はクレセニアから我々とずっと一緒に旅をしてきたんですよ。もちろんその間に怪しいそぶ



りなどはなかったし、そもそも彼女が襲撃に荷担しているなら、我々と一緒に王太子殿下のもとに行くはずがないでしょう？ あそこにはエアデルトの兵士や家令もいた。賊の手引きなどどうやってやると言うのです。それなら一人で部屋に残っていた方が良いはずだし、賊の名前を呼ぶなどという失態を犯すはずがない」

二人の弁護を聞きながら、ルーナはどこか他人事のように話の流れを整理していた。

「つまり王妃様は、わたしがカインの名を呼んだから、王太子様の襲撃の関与を疑ってるってことだよ。で、そうじゃなければ疑いを晴らすために、神木の実を取りに行つてこいと」

考え込むように口元に手をやったルーナは、足下に座るシリウスとレグルスをぼんやりと見つめながら、ふうつとため息を零す。

（自分でも宰相様に『行く』って言っちゃったから取りに行くのは別にいいんだけど、疑いをかけられてつていうのはちょっとやだな。そもそも前世の常識で考えちゃだめなんだろうけど、わたしが疑われるつてことは、この世界じゃ九歳の女の子を、刺客かもしれない、つて普通に考えるつてことだよね）

久しぶりにカルチャーショックを受けながらも、ここは黙っていた方が良さだろうと判断し、ルーナはやり取りを続ける三人へと意識を戻した。

「チツ……エアデルトの王妃もろくでもないな」

リュシオンの舌打ちしながらの言葉に、ルーナはギョツと目を剥く。

（リュウ……エアデルトの宰相様が目の前にいるのに、そんなこと言っちゃつていいの!?)

あわあわと動揺を隠せないルーナに、落ち着けとばかりにシリウスとレグルスがタシツと前足を彼女の膝にのせた。二匹の仕草に束の間ほっこりしたルーナだったが、すぐに我に返つてニール侯爵へ目を向ける。

しかしルーナの心配をよそに、彼はただ苦笑を浮かべているだけだった。

「お怒りはごもつともなれど、王妃陛下の要請をお断りになれば、どんな言いがかりをつけられるかわかりませぬ。正直に申しますと、ルーナ嬢への風当たりが厳しくなる程度で済めばよろしいですが、下手をすると身の安全に関わりませぬ」

「身の安全だと？ ルーナに危害が加えられるとでも言うのか」

もはや怒りを隠さないリュシオンの言葉を、ニール侯爵はただ静かに肯定する。

「かの方は、それが出来るお立場でございます」  
その答えに、リュシオンは苦虫を噛みつぶしたような顔で黙った。そんな彼に代わり、今度はジーンが口を開く。

「貴方の口ぶりでは、まるでルーナがここに留まるより、旅の一行に加わる方が安全のように聞こえますが……」

「そうですね……少なくとも一行には私の直属の部下を選びます。決してルーナ嬢を危険に晒すようなことはせぬとお約束いたします。けれど、この城に残り王妃陛下のご不興を買った場合、安全は保証できかねます」

平静そのものの声音でありながらも、ニール侯爵の口元は自嘲するかのようにならずかに歪んでい

た。

(王太子様までも倒れてしまった今、エアデルトの最高権力者は王妃様。あの人の不興を買っちゃったら、宰相様でも庇かばいきれぬかわかんないんだ……)

ルーナが考えていることは、リュシオンやジーンもわかっているのだろう。ニール侯爵を睨にらんだまま、リュシオンは苦々しく言い放った。

「先ほどの言葉、違たがえるなよ」

「はい。腕の立つことはもちろん、信頼できる者を護衛としておつけします」

真摯しんしに答えるニール侯爵に、リュシオンも納得するしかない。彼はため息混じりに前髪を掻き上げると、忌々いまいましそうに再度侯爵を睨みつけた。

こうしてルーナは『神木の実』を求めて、エアデルトの王都からさらに旅立つことが決まったのだった。

十

しん、と静まり返った部屋の中、ルーナは椅子の上で居心地悪く身じろぎする。

ニール侯爵が出て行った後、リュシオンは不機嫌そうに背もたれに凭もたれかかって黙り込み、ジーンも眉間に皺しわを寄せたまま無言を貫き通していた。

(誰かこの空気、なんとかしてえええ！)

ルーナは心の中で叫びつつ、立ち上がって膝に頭をのせてきたシリウスとレグルスの頭を撫でる。それでもしばらく室内では無言の状態が続いていたが、やがてジーンが大きなため息を一つつき、ポツリと零した。

「王妃ですか……厄介ですね」

「まったく。面白くはないが、ここは侯爵に従った方が、ルーナの身の安全は図れるだろうな」

リュシオンは不意そうに言っただけでルーナに顔を向けた。

「ルーナ。のほほんとした顔をしているが、わかっているのか？ 城にいて王妃の不興を買うよりはましとはいえ、旅となれば魔物や盗賊に出くわすかもしれないんだぞ」

「わ、わかっているよ？ でもわたしにはしいちゃんどれぐちゃんがいるし」

強い視線にたじろぎながらも、ルーナはシリウスとレグルスの背を軽く叩いて言う。それに応えて彼らはリュシオンに向き合った。

「我らがおれば心配ない」

「我らがおれば安全だ」

くわっと口を開けて告げる獣たちを凝視したリュシオンは、やがてフツとその表情を和やわらげた。

「確かにこいつらなら、下手な護衛より役に立つな」

「そうですね。シリウス、レグルス。どうかルーナをよろしくお願いしますね」

ジーンはクスクスと笑いながらリュシオンに同意すると、二匹に頼み込む。

「ルーナのことは、我らに任せておけばよい」

「うむ。人の子などに遅れはとるまい」

凜々しく言い切る獣たちだが、見た目は子犬と子猫。四肢をピンツと張った二匹の様子に、ルーナは胸の前でぎゅっと両手を組んで叫ぶ。

「二人とも可愛すぎだよっ！」

シリウスとレグルス、それぞれ順番に抱き上げて頬ずりするルーナに、リュシオンとジーンは呆れたように苦笑し、その場の空気は一気に柔らかいものとなった。

「ルーナのことは、ニール侯爵といれぐに任せるとして、俺たちの方もその間に調べられることは調べておかねばな」

リュシオンの言葉にジーンは表情を引き締める。彼は顎に手をやり思案しながら口を開いた。

「カインの行方もそうですし、クレセニアでルーナたちを襲った魔法使い、彼が所持していた細工指輪についても調べておきたいですね。何か繋がれば王妃に対抗できる武器になるかもしれませんし」

「そうだな。今回の王太子の事件に限っては王妃は何も知らないようだが、偽王子を容認しているのならばカインについて知らぬはずはない。そう考えればクレセニアでの襲撃に王妃が関わっている可能性は高い。それが掴めれば王妃に対する牽制けんせいにもなるだろう」

リュシオンの推測に、ルーナは知らず知らずのうちに眉を寄せる。そして確認するようにおずおずと問いかけた。

「王妃様は自分の息子を確実にエアデルト国王にしたいんだよね？」

「それは確かだろうな」

「つてことは、自分の息子を傷つけるはずがないよね……？」

「ああ、ないだろうな」

ルーナの疑問に一々答えながら、リュシオンは彼女の言いたいことを理解したのだろう。続けて口を開いた。

「カインを襲うならともかく、自分の息子である王太子を襲う理由は王妃にはないな」

リュシオンが言うように、王妃が王太子を襲うことはありえない。では誰が、と考えれば、やはり浮かんてくるのはカインだった。

もちろんルーナは彼が犯人だとは思いたくはない。しかし、状況から推測するならば賊ぞくはカインとしか言いようがなかった。

「何があったんだろう……カインが人を傷つけるなんて……」

思わずルーナがつぶやけば、リュシオンが苦い顔でそれに答える。

「考えられるのは王太子がカインに斬りかかってきた、というところか」

自衛のために王太子を傷つけてしまった。それは考えられなくてもないが、それでもルーナは今ひとつ納得できなかった。

「でも……今王太子様が死んだとしても、エアデルトの王子として認められていないカインにはなんの得もないよね？」

「そうだな。そう考えれば一番怪しいのはあの偽者——ヘクトルとかいった奴か」

リュシオンはルーナの言葉にうなずき、腕を組んで考え込む。

「でもあの人と王妃様は……仲間？ 確か王妃様のお付きの人と一緒にいたよね……」

確信がないため疑問形でつぶやくルーナに、リュシオンは眉間に皺しわを刻んだ。

「ああ。ということは王妃があいつと繋がっているなら自分の息子を切り捨てたことになる。だがあの時の彼女の様子を見る限り、息子を溺愛してらるって感じだったがな……」

「じゃあ、やっぱりカインが……」

俯うつむいて唇を噛むルーナへ、ジーンが気遣わしげに声をかける。

「ルーナ、もしものことを考えても仕方がないし、きりがない。だからこそ、真実を探すために行動するしかないんだよ」

兄の言葉に顔を上げたルーナは、コクンとうなずいた。

「推測ばかりで不安になっても仕方ないよね。兄様の言う通り真実を前にしてから、初めてどうするか決めないと」

「そうだな。それに状況だけ見ればカインが怪しいのは確かだが、少なくとも本当のことを知る王太子は生きている。彼が目を覚ませば状況は必ず好転するはずだ」

リュシオンはルーナに向けてそう言うと、次にジーンへと視線を移す。

「わからないことを推測するより、まずは一番はつきりとした手がかりである指輪から調べることだな。そこから何か大きなものへと繋がるような気がする」

「はい。それについては私が動きます」

「頼む。俺は国王、そして王太子から目を離さないようにせねば。どのような思惑で、誰がやったのかわからなくても、襲われたのは事実だ。もう一度襲撃される可能性は捨てきれんからな」

（そっか……犯人がカインじゃなかった場合、王太子様の命が助かったことは、彼の死を願っていた人物の計画は失敗ってことだもんね。もう一度命を狙う可能性もあるんだ……）

ルーナの考えを読んだのか、リュシオンは深刻な表情の彼女へ軽い調子で声をかけた。

「心配するな、そのために俺がいる」

自信に満ちたリュシオンの言葉に、ルーナは控えめな笑みを浮かべる。

「いいか。俺は国王や王太子の安全を守る。ジーンは細工指輪の工房から依頼主を探る。そしておまえは王太子を助けるために『アンブロッシア神木の実』を取りに行く。それが俺たちがそれぞれ出来ることでやるべきことだ」

「うん、そうだよーね！」

ルーナはリュシオンの言葉にうなずくと、二人に強い眼差しを向けた。

+

エアデルトの王太子ユリウスが襲撃された日より三日後。

その夜ネグリジェにガウンといった寝支度を整えたルーナは、寝室にある出窓に両肘をつき、そこから見える景色をぼんやりと眺めていた。